

# ネップ関係からみる ブータンの高地牧畜民社会とその変容 ——北部国境防衛と定住化の狭間で

宮本 万里 慶應義塾大学 准教授  
MIYAMOTO Mari

E-mail: mm@keio.ac.jp

2020年3月12日投稿受付 / 2020年3月30日採択決定

## Abstract

The Bhutanese government's contradictory policies of promoting sedentary settlements in the name of modernization and encouraging the continuation of livestock herding in the highlands to protect borders have created eclectic "highlanders" who build houses in the lowlands while keeping yaks in the highlands. While most of the highlanders' economy now relies on cordyceps collection in the northern borders, highlanders based in enclaves of the great Himalayas such as *Lagap* could not fully rely on this new economical resource. As a result, yak herding still remains a key means of livelihood and an indispensable source of identity. This article aims to understand how the highland pastoralists of Bhutan maintain their conventional livelihood from these two points of view. In this article, I analyze the attributes and features of multilayered borders between pastoralists in the enclaves of the highlands and agricultural farmers in the lowlands. I also analyze the transformation of the government's highland policies after the recent northern border disputes with China.

**Keywords** Bhutan, Highlander, pastoralists, Border disputes, Cordyceps, Sedentarism

**キーワード** ブータン、高地民、牧畜民、国境問題、冬虫夏草、定住主義

## I はじめに

山岳地域に住まう牧畜民は、季節に応じて垂直的な移牧を行い、稲作を含む農耕を取り入れ、時に稜線を超えた交易に従事するなど、その生業の複雑性が一つの特徴となっている。こうした牧畜民の姿は、低緯度（熱帯・亜熱帯）の大山脈であるヒマラヤ地域においても特徴的であるが、なかでも農耕の比重も高い比較的低地の牧畜民と、家畜飼養に対する依存度の高い高地の牧畜民は、その生業のバラエティーや信仰、慣習や言語などの属性の違いからしばしば異なる文化的単位として表象されてきた。

ブータンの主流社会では、比較的高標の高地の村と標高の低い冬の村との間で行われる季節的な移住の習慣がよく知られている。そこでは乳畜および役畜用のウシ数頭を所有する有畜農耕民を「ブータン国民」の定型としながら、水田の有無とウシの頭数により豊かさが計られてきた。他方で、標高3000mを超える高地に暮らす者は、同じく季節的な移住を習慣とするが、ウシのかわりに寒冷地に耐性を持つヤク<sup>\*1</sup>やヒツジを飼育し、水田を所有せず、畑地を持たない者もいる。そして、これら寒冷高地に生きる高地牧畜民は、低地の牧畜民や農耕民と差別化されつつ、北西部ではジョップ、北東部ではブロックパ、そして中西部ワンディポダンの高地では特にラガップと呼ばれた。なかでも、北西部ラヤ

や東部メラ・サクテンの牧畜民は、独自の民族衣装や慣習を維持しながら北部国境地域の厳しい環境に生きる、いわば〈孤高の山岳民族〉として扱われ、観光政策では国家主導の多文化主義の証左として象徴的に描かれてきた<sup>\*2</sup>。他方で、ラガップと称される中西部の高地牧畜民は、中部山脈の飛び地的な高地を定住村および放牧地とし、文化的にも特徴をもたない農耕社会の周縁の民として位置付けられ、ブータンの牧畜民研究でもしばしば等閑視されてきた。しかし、低地の農耕社会と密接なつながりを持つ彼らの生活様式は、山岳高地の牧畜社会における生業の多様性と農耕社会とのつながりの重層性を一層鮮やかに我々に提示する。

1950年代にブータン政府が国の近代化と国民統合へ向けて歩みだして以降、遊動的な民による移動耕作や移牧は徐々に発展への障害として認識され、牧畜民や焼畑耕作民の定住化が強く志向されてきた。しかし、高地に居住する牧畜民たちは、主流社会の周縁化の力に屈し、末端に甘んじているようにみせつつも、自らの生活を大きく変えることなく堅持し、国家による包摂と階層化に抗してきたようにみえる。その地を訪れる官僚たちは、もてなされることなくあしらわれ<sup>\*3</sup>、国家による規制や制度も浸透するまでに多くの時間を要してきた。そうした人々の在りようは、P. クラストル(1987)が描いた「国家に抗する社会」や、J. スコット(Scott 2010)が描いたゾミアにおける「統治されない」人々の残照に合致するようにもみえる。それでは、彼ら高地に居住する牧畜民は、主流社会や国家の持ち込む様々なまなざしや制度にいかに対峙し、どのようにして自らの生業と暮らしを適応させてきたのだろうか。

本稿では、まず、近年のブータン政府による高地民政策の変遷をたどり、そのなかで高地牧畜民の位置づけがいかに変容していったのかを明らかにする。そのうえで、特に中西部高地で〈ラガップ〉と呼ばれてきた高地牧畜民の社会をとりあげ、彼らの生活世界の変遷を、低地の定住農耕民世帯との歴史的な関係性から考察してみたい。分析対象としたデータは、2004年から2019年の間に実施したブータン中西部高地での聞き取り調査の記録と、政府農林省および観光局の公刊物である。調査対象村は、ワンディボダン県下のカジ、セフ、ポブジカ、ガンテ、ジェナの各郡、および隣県プナカ県下のシェガナ郡のいずれかに属している。

## II 「高地民」政策の変遷

ブータン政府がヒマラヤ高地に住むいわゆる「高地民」を主な対象とした政策をうち出しはじめたのは、比較的最近のことだ。その要因の一つが、ブータン北西部国境でおこった領土問題である。2017年に中国軍による領土侵犯が明らかになると、ブータンの保護者を自認するインドはブータン領内で国軍を北進させドクラム地域に展開した。結果、中印両軍による睨み合いは2ヶ月あまり続いたが、同年8月末にインド軍がついに撤退し、問題は一定の収束をみた。しかし、この出来事はヒマラヤ地域における中国の道路建設計画を白日の下に晒し、ブータン政府は中国との軍事衝突を回避しつつ国境防衛の強化を図る必要に迫られていく。そして、その際に注目されたのが、高地に住まう牧畜民たちであっ

た。2017年10月に首都で開催された第一回高地民会議は、北部10県から350名の高地民を呼び寄せた大規模なものであり、政府の関心の高さを伺わせた\*4。

北部高地における開発は、2017年に先行して10年以上進められてきたが、それらの開発政策は、ときに高地民の低地への再定住を促すものとして働いた。ここでは、2000年代にブータン政府によって導入された高地開発政策のうち、王による土地の再分配、冬虫夏草採集の解禁、および「高地民祭り」についてその概要を説明したい。

## 1. 王による土地の再分配

国家主導の開発計画が始まった1960年代以降、農業省畜産局はウシの飼養を行う比較的低地の牧畜民に対して、外来牛との交配や、定住的な酪農形態への移行など、様々な牧畜振興策を実施してきた\*5。他方で、寒冷高地でヤクを飼養する高地牧畜民が、経済開発の対象として認識されたのはごく最近のことだ。そして、そのうちの 하나가、農地や宅地の再分配という、いわゆる再定住政策といってよいものだった。

ブータンにおいて企業、個人、僧院などが所有する宅地や農地以外の森林や放牧地は基本的に国家に属し、それら国有地を再分配する権利はおよそ一元的に国王に属している。国王が国民に下賜する行為をキドウと呼ぶが、家屋や種苗、改良牛の提供や労役の免除などといった様々な下賜の対象には土地も含まれており、農地や宅地の多くがこのキドウ制度をとおして再分配されてきた。

ブータン中西部の高地牧畜民もまた、キドウによる土地の下賜を受けてきた。例えば、後述するワンドウ・ポダン県のB・ラガップは、第五代国王によって2013年に15ディスマル\*6の宅地の下賜を受けている。配分された場所は、高地にある夏の定住村から徒歩で4時間ほど下った山間地にあり、谷川に沿った緩やかな傾斜地に位置している。土地は、B・ラガップのすべての世帯に与えられ、人々は下賜からおよそ10年以内に利用を開始するよう指示された。下賜の後、最初の数年間は放置していた牧畜民たちも、現在は多くが定住農耕民の村人たちと同じように木造2階建ての住居を建て、毎年夏の終わりには世帯の一部が移り住むようになっている。

## 2. 冬虫夏草採集の解禁

高地民を対象とした近年の経済振興策のうち最も影響力の大きいものに、冬虫夏草採集の解禁がある。およそ5000mを超える高地で雨季に菌糸が地表に出る冬虫夏草は、中国など東アジアを中心に漢方薬として高値で取引される希少な薬草である。ブータンでは国家主導の森林資源保護政策により薬草や林産物の採集が制限されてきたが、第四代国王は2004年に「高地民」に対して冬虫夏草(ヤツァゲンボ)の排他的な採集権を与えることを決定した。

採集権は各世帯最大3名に与えられ、資源保護の観点から採集期間は一年のうち6月の1ヶ月間のみと定められた。政府は収穫後の7月から8月の間に各郡(ゲオッグ)で競売を開催し、牧畜民が公式の市場で収穫物を売買できる場所を提供した。例えば、2017年度の森林局の報告では、全国で3198名の高地民が採集許可を取得し、そのうち2281名が実際に

売り手として競売に参加している<sup>\*7</sup>。また、同年に競売に出た冬虫夏草の総重量は376キログラム、総売上額は2億300万ヌルタム<sup>\*8</sup>であった。そのうち、ワンドゥ・ポダン県は全国でも最大の収穫量(255.36キログラム)を記録しており、冬虫夏草採集が牧畜民にもたらした経済的影響の大きさがうかがえる。

冬虫夏草の育つ標高5000メートル以上の高地は、古くからヤクの放牧に利用されてきた場所である。政府は、それらの放牧地で慣習的な用益権を持つ高地牧畜民に対してのみ、その採集権を認めたのだった。しかし他方で、一度採集権を付与された牧畜村については、その後はヤク飼養を継続しているか否かに関わらず権利が保護された。それは、一部の高地民のあいだでヤク飼養に対する動機を失わせ、牧畜を放棄する元牧畜民を生み出しつつある。

### 3. 「高地の文化」への注目

冬虫夏草採集が解禁された当初、この新たな生業の出現と拡大は、〈貧しい牧畜民〉に対する経済振興策として歓迎された。しかし、際限のない資源収奪に危機感を覚えた森林局は、生態環境保護や生物多様性保存の観点から冬虫夏草採集の非持続性を訴え、牧畜の継続を促すようになっていく。その結果、2010年には森林局と観光協会の肝いりで、「遊牧民」の文化や伝統保護を目的とした「ノマド・フェスティバル」(遊牧民祭り)が開催される。

開催地はブムタン県の国立公園であり、時の農林大臣ペマ・ギャムツォは開会スピーチ<sup>\*9</sup>で、「冬虫夏草への依存は非持続的である」とし、「環境を維持し文化を保護すればエコ・ツーリズム開発のような新たなチャンスも到来する」と述べて、「遊牧民社会」の観光資源化を示唆した。2014年度の祭りでは、「遊牧民」の文化や生活様式、生産物における独自性と多様性の展示が行われたが、同時に開催地の知事は、祭りを「遊牧民が辺境沿いの国境防衛に果たしてきた不可欠な役割を、一般市民(commoners)が理解するためのプラットフォーム」として位置づけ始める<sup>\*10</sup>。知事はまた、祭りを、「農業・畜産分野における最新の科学的進歩を遊牧民と共有する機会」とも位置付けており、高地の発展とともに一般市民による「遊牧民社会」のよりよい理解が目指されていたといえよう。

国の主権と領土を守るという、「神聖で不可欠な義務」を持つ高地民、というイメージは、2015年度にも繰り返し語られており<sup>\*11</sup>、開始当初ブータン市民や旅行者を対象に高地牧畜民の文化的独自性を強調し、その観光資源化を意図していたイベントは、徐々に高地牧畜民の防衛上の役割を確認するための機会としても利用されていった。この傾向は、2016年にノマド・フェスティバルが「ロイヤル・ハイランダー・フェスティバル」(王立高地民祭り)として再編されると、いっそう先鋭化した。対象は広く「遊牧民」を包摂するものから「高地民」へと狭められ、開催地も北部国境を覆うガサ県へ変更され、開催時期は牧畜民が低地へ移動を始める10月へ変更された。

会場には北部高地民が夏の住居として利用するヤク毛の黒いスパイダーテントが張られ、高地牧畜民の暮らしを間近に観察する機会を観光客に提供した。祭りは、第五代国王の強いイニシアティブで実施され、ガサ県の美しい自然や歴史、文化や伝統を、国内外に周知することを一つの目標としている<sup>\*12</sup>。観光協会は、高地民の持続可能な生業の革新性

を示し、「ブータンの誇り」として高地文化を提示することを祭りの目的として掲げ、ブータン各地の高地民が、互いの「価値や知識、技術、高地とヤク牧畜に関する最上の慣習」を交換しつつ学びあうことも重要な目的とされた。

ここで保護の対象とされた高地の共同体における技術は、過去数十年間で既に大きく失われようとしていた。北西部高地のラヤやハでヤク毛のテントを設計できる者は既におらず、B・ラガップの村でも毛織物製の男性用民族服は約25年前から着用されていない。この打ち捨てられた慣習や衣装の復興や保存は、北部国境問題が先鋭化して初めてナショナルな課題として認識され、政府の注目を集めるに至る。そこでは、北部高地牧畜民の文化や生活が、主流社会にとっての〈異文化〉から、〈我々の文化の一部〉へと移り変わり、遂には〈ブータン国民の誇り〉として再定位されるプロセスをみることができる。

#### 4. いかに関わりとどめるか

このように、高地牧畜民の文化への注目が高まる一方で、高地の暮らしは大きな変化のなかにある。政府による高地政策は、高地民の経済的な上昇を一つの柱としており、定住化とセットになった電化や道路の敷設が進むと、高地民の低地への移住や子供の就学に伴う牧童の不足は深刻化し、冬虫夏草採集の解禁後は牧畜そのものの放棄も進んだ。これら高地人口の減少や遊動的な牧畜の放棄は、一方で近代化と発展の証として認識され、農地の所有と「ブータン風」家屋の建設による主流社会への同化も、「ブータン国民」内部の同質性を重んじる政府の政策に合致するものとして歓迎された。しかし、高地に居住する牧畜民人口の減少は、その後国防上の問題と結びつけられながら、危機感を持って捉え直されていく。

中国軍による国境侵犯が問題化した2017年、第五代国王は北西部高地の牧畜村を巡りながら、人々にヤクを売らず高地で牧畜を継続するよう要請し、そのための必要な援助を約束していった。しかし、これらの要請にも関わらず、高地社会におけるヤク牧畜からの撤退は、不可逆的に進行しているように見える。それでは、これまでの高地牧畜民の暮らしはどのように構成され、それは現在の変化に対していかなるレジリエンスを持ち得るのだろうか。以下では、中西部高地の高地牧畜民社会に注目し、彼らの生活のありようを、農耕民とのかかわりのなかから描き出してみたい。

### Ⅲ 「ラガップ」の暮らしと境界

ブータンの言語分布についてはじめて網羅的な調査を行ったG・ヴァン・ドリームは、著書の中で、中西部ワンディポダン県北部セフ郡のヤク飼い<sup>\*13</sup>の言語がラカ(Lakha)と呼ばれていることを明らかにし、その話者をラカパ(Lakhapa)あるいはラップ(Lap)と呼んだ(George van Driem 1998: 16)。ラ(La)とはゾンカ語で峠や山を指し、カ(Kha)は言葉を意味する。ラカとはつまり〈峠の言葉〉であり、ラカパは〈ラカを話す者〉、ラップは〈峠に住む者〉というほどの意味である。他方、ワンディポダン県全体でしばしば耳にする〈ラガップ〉という呼称は、発音的にもヴァン・ドリームが示したラップやラカパと重なるが、

ラガップと呼ばれる牧畜民は必ずしも全員がラカの話者ではなかった。ワンディポダン県内でもセフ郡北部やポブジカ谷の一部では、ヴァン・ドリームがラカとして同定したと考えられる言語<sup>\*14</sup>が使用されていたが、それ以外の地域の高地牧畜民は、その多くが国語でもあるゾンカ語やその方言を母語としており、〈ラガップ〉を単一の言語集団として同定することは難しい。

それでは、〈ラガップ〉とは誰であり、彼らを独自の民族集団あるいは職業集団として特徴付ける属性があるとすればそれは何なのか。本節では、低地の農耕民社会との間で形成され、維持されてきたとされる相互共益関係(ネップ)に注目しながら、ラガップの生活世界と当該社会に根付く価値体系を浮かび上がらせてみたい。

## 1. ネップ関係と多様な交換財

ブータンの山岳高地を居住地とする牧畜民社会は、農耕を主な生業とする主流社会からは異なる文化的単位として周縁化される一方、両者は生産物やサービスの交換をとおした強固な相互扶助関係を維持してきた。この関係におけるパートナーは、互いに滞在場所や滞在者を意味する〈ネボ〉や〈ネップ〉と呼び合い、ワンディポダン県以外にも、北西部のガサ県、西のプナカ県とティンブー県、東のタシガン県などで事例が報告されてきた。

長年ブータンで調査を実施してきた地理学者の月原敏博は、90年代初頭の論考でネップ関係を「信頼のおける友人」および「中央の谷々のヤク、牛の所有者とその放牧請負人」と説明する現地の人々の語りを書き留めており、それは「互いに宿泊所、食事などの面倒をみてやる関係」でもあるとされた(月原 1992: 151)。また、ブータン東部の山岳地で短期調査を実施した稲村哲也も高地牧畜民の調査でネップに注目しており、それが特定の農民との間の「交易パートナー関係」であり、他人同士で結ばれる「擬制親族」とも「制度化された友人関係」ともいえ、相互の関係は世代を超えて継承されると記している(稲村 2014: 215, 235)<sup>\*15</sup>。

それでは、〈交易パートナー〉や〈牧夫と家畜所有者〉として描かれるネップ関係は、中西部の高地民の事例にどの程度当てはまり、また〈制度化された友人関係〉や〈擬制親族〉とは実際に何を意味していたのだろうか。

ワンディポダン県高地には、高地のN村を主村としながらヤクの放牧を行う牧畜民がいる。彼らは夏のあいだ良質な牧草を求めて北部国境近くまで上昇したのち、冬が近づくと徐々に高度を下げ、最終的には標高3800メートルほどの高さにある複数の放牧地を循環的に利用しながら春を待つ。この冬の間の滞在村の一つがB村(標高2158m)であることから、B・ラガップと呼ばれるこの高地牧畜民は、低地の複数の農牧村とネップ関係を結び、コメやムギなどの穀物およびトウガラシなどの必需品を獲得してきた。

谷あい面に面した小規模な農牧村であるK村もその一つであり、秋の収穫期には毎年、それら高地から降りてくる牧畜民を家に迎え入れてきた。高地牧畜民は放牧地で作り貯めたヤクのチーズやバター、またヤク肉などを運び入れ、それら全てをコメやトウガラシなどに交換すると、再び山に戻っていく。その間、ネップとなる世帯は食事と酒で彼らをもてなし、安全な寝床を与えた。高地民は複数の農牧村にネップを持つことで、それぞれの土

地の特産品を得ていた。比較的標高の高いB村ではトウガラシが交換財となる一方で、K村ではコメを手に入れることができた。

また、この地域では、ヤクのバターやチーズといった乳製品の他に、〈シンレップ〉と呼ばれる屋根用の木片が重要な交換財となってきた。シンレップは、ブータンの家屋の屋根を覆うために使われる約15~20センチメートル四方の平らな木片である。2枚ひと組で約70セット(140枚分)が一軒分とされ、世帯主は通常3年から5年の頻度で行われる屋根の葺き替えに合わせて入手する必要がある、それがB・ラガップによってもたらされていた。

B・ラガップの共同体では、慣習的に女が搾乳や餌や水やりなど主に家畜の世話と乳製品づくりを担当し、男はコメやムギなど主食となる穀物の確保に責任を持ってきた。シンレップは高地民にとって家畜の乳量の少ない冬から春にかけての主要な交換財であり、その製作は高地牧畜民の男性にとって最も重要な作業の一つであった。男性たちは放牧の合間に一日最大で40枚ほどのシンレップを作り、一定量になると売りに山を降りたという。農耕民も、高地民が定期的にシンレップを持ち込むために、葺き替用資材を心配する必要がなかった。N村出身の60代の女性は、夫を亡くした後にシンレップの運び手がいなくなり、結果的にネップ関係も途絶えてしまったと語っており、この木片がB・ラガップを取り巻くネップ関係の維持にとって長らく重要な資源であったことを示唆している。

このように、多様な財の交換によって相互共益的な関係を維持してきた両者であるが、その関係の安定性は、交易の外で行われた慣習的な配慮によっても担保されてきた。それはチョムとよばれる手土産の交換である。ブータンで友人や遠方の親戚の家に行く際、村人であれば自作のコメやトウガラシ、バターやチーズを、町の間人であれば茶葉やマッチ、布などをチョムとして持参し交換するのが一般的であったが、この習慣は高地牧畜民と農耕民の間にもみることができた。B・ラガップはホスト世帯に対して、バターや乾燥チーズなどを持参し、それに対して農耕民の側も返礼として竹ザル(パンチュ)数杯分の炒り米(ザオ)や穀物から作る蒸留酒(アラ)を供与した。それだけではなく、旅立ちの朝には帰路で食べる分のコメやトウガラシなども忘れずに持たせなくてはならない。そして、農耕民がB・ラガップの放牧地にネップを訪ねる際には、交換財としてのチーズやバターに加え、チョムや帰路の食料としてひと抱えの乾燥肉などを持たされた。

このような気前の良い手土産の交換が行われることで、高地牧畜民と低地の農耕民との安定的な関係が築かれたが、そこには同時に差別と排除の契機が存在してきた。ブータンの家に滞在していると、上位の客人(役人、高僧、外国人、首都からきた親族など)を最上の部屋である奥の仏間に宿泊させる一方で、日雇い労働者や呪術者などはしばしば入り口に近い場所に宿泊させる様子を見ることができる。食事をとる居間兼台所では、人々は他者との力関係を図りながら、自らの座るべき場所を探り当てていた。B・ラガップの場合、農耕民のネップの家で与えられた寝床は、台所の隅や居間の入り口付近、階下の穀物貯蔵室、あるいは半野外の軒下などであり、食事をとる際には自ら入り口の扉付近に座を選んだ。食事や酒などが気前よくふるまわれる一方で、ヒツジやヤクの毛皮を身につけ、異質な匂いや振る舞いをもち込むラガップたちは、客であると同時に、完全に相容れることのない

異邦人・他者であり続けたともいえるだろう。他方で、農耕民が高地の放牧地を訪ねる際には、しばしば、囲炉裏のそばの暖かい寝床と、新しい毛布が与えられた。

## 2. 屠畜を介した祭祀の共有

こうした農耕民と高地牧畜民の間に厳然と横たわる異質性や他者性は、牧畜民が持つ屠畜者としての属性によって、その一部を説明できるだろう。家畜を屠るという行為が、牧畜という生業の一部を構成する日常的で不可欠な行為であることは、多くの牧畜社会の事例からも明らかだ。ブータンの場合、ウシを飼う低地の牧畜社会では、「不要なウシ」は時に耕作用の役畜として農耕民に譲られたが、寒冷高地でしか生きられないヤクを飼う牧畜社会では、雄ヤクは多くの場合去勢され肉畜としての運命をたどる。ヤクは牧畜民の手で自家消費用に屠畜された他、秋には低地の市場や村に持ち込まれてその肉が売買された。そして、彼らの屠畜・解体の技術は、しばしば農耕民により流用されてきた<sup>\*16</sup>。

ブータンの農村部では、自家消費用のブタの飼育が広く行われていたが、ワンディポタン県の農村部も同様であり、その肉はチョコと呼ばれる年法要や祭りの開催に不可欠であった。B・ラガップがネツプ関係を結んできた低地の農村村でも、年に1～3回の頻度で土地神や仏教神を祀る祭祀や法要が開催され、その都度ブタを屠るためにラガップが呼ばれた。

法要の数日前に呼ばれるラガップは、施主の手で最後の餌を食べたブタを追い回して捕えると、棍棒で鼻の付け根を殴打しブタを撲殺する。その後、着火した麦藁の束を体に近づけて体毛を焼き切ると、表皮を水で洗浄しながらナイフで削ぎ落とし、全体をいくつかの部位に解体する。屠畜者は、腹部の一番良い部位の肉塊約5キログラムを報酬として受け取り、さらに洗浄した腸に小麦、山椒、トウガラシの粉末を詰めた腸詰の加工品（ジュマ）を5キログラムほど分配された。これらの屠畜者は、作業を終えると客として食事と酒を供されたが、彼らへの給仕が、僧侶や親族、隣人などより先に行われることはなかった。僧侶を最上位とする儀礼空間において、殺生行為を担う高地牧畜民は穢れた存在として最低位に位置付けられたからであり、法要のあいだに祭壇のある仏間に招かれることも稀であった<sup>\*17</sup>。

しかし、チーズやバターを供物として供与し、ブタを屠るという重要なサービスを提供する高地民は、農耕民世帯の祭祀において不可欠な存在であったことは明らかだ。屠畜行為は、高地牧畜民を、不殺生戒が覆う仏教世界とその影響が色濃い定住的な農耕民社会の周縁に追いやり差別化の契機をあたえたが、他方で農耕民の生業にとって最も重要な土地神への供儀を滞りなく行うことを可能とし、儀礼の真正性や浄性を高めることに貢献した。そして、それによってもたらされる神々の祝福を、両者は共有してきたといえるだろう。

## 3. 物乞い(ランバ)という名の負債の回収

ネツプ間における恒常的で継続的なモノとサービスの交換は、固定的な交換レートの下で行われる厳格な等価交換のようにもみえるが、実際のところ交換は必ずしも共時的に



発生してきたわけではなかった。その理由は個々の生業の特徴に依存する。牧畜民は牧草が潤沢で家畜の乳量が増す夏の間により多くのバターやチーズを供与できたが、農耕民は秋にならなければコメやムギなどの穀物を収穫することはできない。したがって、牧畜民が夏に渡したチーズやバターの多くは、農耕民のネップ世帯への貸し分として記憶され、それらは秋以降にコメやムギの形で回収された。回収の時期は高地民が低地へ向かって移牧をはじめめる時期と一致しており、例えば2019年11月の調査時には、主村から放牧地(標高約3800メートル)<sup>\*18</sup>へ移動した直後のB・ラガップたちが、小屋に子供と老人を残し、コメの回収のため山を降りていた。

このように、高地民と低地の農耕民との間の交易関係は、互いへの長年の信頼に基づいた信用貸しといっても良いものだった。夏の間は農耕民が借りを作り、冬の間は高地牧畜民が借りを作るという関係は、少なくとも高地牧畜民にとっては両者を同等の関係とみなすに十分なものだった。しかし、冬期に行われるコメの回収を、自らの〈負債の支払い〉ではなく、他者への〈施し〉とみなす農耕民も少なくなかった。たとえば、冬期に乳製品などの交換財を持たないままネップの世帯を訪ね、トウガラシやコメの分配を要求する行為は、農耕民の村ではしばしば〈物乞い〉を意味する〈ランバ〉として語られた。しかし、乞われた相手はその可否を自由に意思決定できるはずの〈施し〉は、実際のところ未成立に終わることはない。例えばB村では、B・ラガップがランバに訪れるときには、筈数杯分のトウガラシなど、相手が求めるものを即時的な対価を求めず「いつもあげる」とする世帯が多くを占めていた。B・ラガップの70代の男性は、ランバなどで農耕民のネップを訪ねた時にはいつも「良くしてもらった」といい、「お互いに必要なものを交換している」ことを理由として、「向こうも良くしてくれるべき」と言葉をつなげる。

〈物乞い〉という表現に含意される施す者と施される者という関係は、先行研究で相互共益的として描出された二者の関係性に一定の傾斜をもたらし、その非対称性を想起させる。他方で、それを農耕民のネップ世帯が高地牧畜民に対して背負う負債の支払いの一部と考えるB・ラガップの人々の見方に基づくと、両者の関係はあくまでも対等で対称あり、自らの要求は正当なものとなる。それでは、こうした認識は、農耕民のネップ世帯に全く共有されていないかという、そうではなさそうだ。B・ラガップによる〈物乞い〉は、相手は無作為に抽出して行なわれるわけではない。それは自らのパートナーであるネップに対して行うものであり、それを農耕民が認識しているからこそ、「いつもあげる」という行動が当たり前ひきだされるとも言えよう。

#### 4. 農耕社会の〈他者〉を超えて

中西部ブータンにおいて、B・ラガップが農耕民との間で形成してきたネップ関係は、単なるモノを介した交易パートナーを超えたものだ。そこにはサービスの交換と、互いの共同体の祭祀を滞りなく行うための様々な配慮が含まれていた。

先行研究で言及された交易関係が、農作物と乳製品やヤク肉の交換として限定的に描かれた一方、この地域ではシンレップと呼ばれる屋根用の木片が重要な交易資源とされており、乳製品を自給できる低地の牧民との間でも資源交換が存在する可能性を示唆してい

た。そこでは、牧畜民と農耕民といった単純な二分法では分類しきれない、森林資源を介した関係性が作られていた。さらにこの地域のネップ関係では、宗教儀礼に伴う屠畜労働が、高地民を低地の農耕社会により深く結びつけてきた。生き物の殺生は仏教が深く根付く稲作農耕社会において忌むべきものとされたが、屠畜は同時に様々な儀礼の実施に不可欠であった。その中で、ラガップたちは、自ら屠畜者という属性を纏うことで、農耕社会内部の矛盾を引き受けてきたのだ。

こうした相互扶助関係は、主流社会からは〈農地を持たない貧しい牧畜民〉と〈水田を持つ豊かな農民〉との間の非対称な関係として理解されてきたが、実際にはネップから屠畜者に対する十分な報酬と歓待の存在が明らかとなり、高地牧畜民は農耕民の祭祀を共に支えながら、その宗教共同体の一部を構成してきたことがみてとれる。高地牧畜民はネップとともに仏教僧の祝福と神々の加護を共に受けるべき存在として位置づけられ、農耕民の側もまた山岳高地の村で行われるラガップの祭祀や儀礼に必要なコメやトウガラシを有償・無償で供与しながら、彼らの共同体の宗教空間を支えてきたのだ。

このように、農耕民のネップと高地民のネップとの二者関係は、互いへの配慮により維持されてきたが、これら二者の関係が〈擬制親族〉を超えた血縁関係に発展することは稀である。K村出身で郡長のW氏(男性 57歳)は、郡下のラガップと他の農民との関係は「今はもう皆同じ」だという。その理由として、ラガップが冬虫夏草によって豊かになったことを挙げ、農耕民世帯よりも大きな自家用車を所有することをその証左とした。その上で、両者が婚姻関係を持つことも今なら可能だろうと述べる。しかし、実際にB・ラガップとネップの農耕民の間で婚姻関係が結ばれた事例は、筆者の調査中一度も確認できていない。B・ラガップとネップ関係を持つ農耕世帯の女性たちに尋ねると、彼女たちは笑った口を手で覆いながら身をよじり、「(結婚を)した人はいないだろう」と答える。〈異質な他者〉であるラガップの男性との結婚は、彼らが獲得した富や豊かさに関わらず、現在もまだ彼女たちの想像の範疇の外にある。他方で、B・ラガップの人々が低地の女性や男性との結婚を望んでいるかと言えば、そうではなかった。高齢により山を降りてB村に暮らす男性(73歳)は、N村の外の人間と結婚したい若者がいれば「止められない」としつつも、「自分の村の娘らは自分たちで面倒をみるべきだ」と語る。それは、B・ラガップが内婚集団としての側面を持つことを示唆し、また中西部高地の牧畜民と農耕民の間に横たわる境界の強固さを物語っているともいえるだろう。

B・ラガップは、乳製品やヤク肉、シンレップの供給者でありつつ、同時に屠畜者および物乞いであることをとおして、複数の農耕民のネップと複層的なつながりを維持してきた。そこにある遊動性や殺生との親和性は、定住的で仏教信仰の強い稲作農耕社会との間に一定の距離や非対称性を生み出したが、両者は個々の属性を保ち境界を明確化しつつそれを垂直的に往来し続けることで、互いの共同体の暮らしと宗教空間をより豊かなものへと転じてきたといえるだろう。

### 1. 定住化政策とネップ関係の変容

B・ラガップの夏の村であり主村として認識されるN村は、長らく住居として小さな小屋が立ち並ぶのみで村寺も十分な畑もない、うち捨てられたような簡素な村であったとされる(現在は二階建ての寺が建設され家の建て替えが進んでいる)。全世帯がヤク飼養に従事して遊動的な暮らしを行っているため、村人全員がN村に一堂に会するのは8-9月の2ヶ月間のみであり、その期間に、共同体の繁栄と家畜の豊穰を願い、八べと呼ばれる土地神への動物(ヒツジ)供儀が共同で実施された。その後、世帯ごとの年法要(チョコ)を終えると、牧民たちは再び数グループに分かれて家畜とともに南へ下り、放牧地を移動しながら過ごす。冬の放牧地はグループごとに4-5箇所あり、1か所の放牧地に1ヶ月程度滞在する。冬の深まりとともに徐々に放牧地の高度を下げ、その後、夏にかけて再び同じ放牧地を辿りながらN村付近の共同放牧地へ戻っていくのだ。B・ラガップの生活様式は、高地に夏の定住村を維持するものの、基本的には一年中家畜を追って移動を続けるという、「純遊牧」(Khazanov 1994)に近い形態で行われてきた。

しかしながら、B・ラガップの人々は、1950年代の第三代国王の時代から、土地のキドウとひきかえに低地に降りて定住するよう説得をされてきた。当時村代表を務めた老人は、国王やその使者たちが繰り返しキドウを提案してきたことを覚えていた。しかし、それらの提案はごく最近まで特に顧みられることなく、彼らはより自由に山々を動きまわり、ヤクを飼いつづけることを選択してきたのだ。しかし、こうした生活様式も過去15年ほどの間に大きく変容しつつある。

彼らがネップ関係を結ぶ村は複数存在したが、そのうちN村から山を下って7時間ほどの距離にある村がB村(標高2158m)である。B村には以前は7世帯の農耕民が定住するのみだったが、2004年以降、15世帯のB・ラガップが土地を購入して家を建て、越冬村として利用するようになった。B・ラガップが越冬村を持ち始めたきっかけは不明であるが、2004年当時にB村に土地を購入した牧畜民の一人は、賃金労働によって貯蓄した現金を元手に土地を購入し、家を建てることを決めたという。B村はラガップとネップ関係を持っていたプナカ県シェガナの村人が夏の移住地として利用してきた土地であったが、その後季節的移住の習慣を放棄して一方に定住するようになっていた<sup>\*19</sup>。そうして空白ができたB村には、B・ラガップのほかにも多くの農牧民が入植し、村は出自の異なる複数の集団によって構成されるようになっていく。冷涼で乾燥した気候のB村では、現在多くの元牧畜民が商品作物としてトウガラシ栽培を行っている。

こうした自主的な低地への移住に加えて、2013年には国王による土地のキドウも行われた。N村から徒歩で4時間ほど山を下った場所にあるD村に与えられた土地は、用途を宅地に限った小さなものであるが、それでも多くのB・ラガップが冬の村として木造二階建てのブータン式住居を建設した。農地がないD村を冬の定住村にする人々は、基本的には従来のようにヤク飼養と冬虫夏草採集という高地の暮らしを維持することが前提となっており、B村を定住村にする人々以上にヤク飼養に依存する比重が高く維持されて

いる。

自動車道路が敷設されたこれらの村々に住居を得たことで、ネップとの交易方法も否応なく変化している。従来その時々滞る放牧地から最も近いネップの村へと直接乳製品を運んでいたが、現在は低地の村に建設した家の中継地として生産物を一旦山から降り、道路を使って自家用車で運搬するという方法にかわっている。それにより移動時間が短縮されたことで日帰りが可能となり、二者関係でも重要な要素であった宿や食事の相互提供はもはや不要となりつつある。儀礼における屠畜のサービスや、食事や酒、チョム、寝場所の供与をとおした場の共有が両者の豊かな結びつきを生み出してきたネップ関係は、生産物の直接的な交換関係のみが残存する一面的な交易パートナーへと急速に変容しつつあるといえるだろう。

## 2. 冬虫夏草採集の拡大とヤク飼養

低地の村落への半定住生活とともに、ラガップの生活世界や経済状況に大きな変化をもたらしたのが、2004年に解禁された冬虫夏草採集である。高地に居住する牧畜民に対して排他的な採集権を与えたこの政策は、既存の社会経済構造に対し二つの面でインパクトを与えた。一つには、古くから広大な放牧地に対する既得権を有し、その使用料として牧畜民からバターやチーズなどの現物を得てきた既存の支配階層や特権階層を、冬虫夏草をめぐる新たな権益構造から完全に排除したことである。もう一つの点は、高地民に対して牧畜に依存せず現金収入を獲得する道を与えたことで、本来の生業とされてきた牧畜を放棄する高地民が多く出たことである。それにより、農耕民とのネップ関係が失われた地域も多かった。

ワンディポダン県ではセフ郡やカジ郡のヤク飼養者が採集権付与の対象となったが、牧畜民として両者がたどった道は対照的だ。ヤク飼養者の多い北部の村のほぼ全戸に採集権が与えられたセフ郡では、その後多くの牧畜民がヤクを手放している。2019年3月の調査時に聞き取りを行った4世帯でも、うち2世帯がヤクを既に手放し<sup>\*20</sup>、残り1世帯は買い手を探していた。他方で、カジ郡のB・ラガップの場合は、全38世帯がヤク飼養を継続し、同時に冬虫夏草採集に従事していた。

6000メートルを超える採集適地までの距離は、セフ郡からは徒歩5日間、カジ郡からは徒歩7日間の道程である。B・ラガップが用益権を持つ放牧地での採集量は決して多くはなく（ある世帯の2018年度の収穫量は250～300グラム、競売で得た収入は3万2800ヌルタム）<sup>\*21</sup>、隣県のルナナ郡に広がる放牧地に侵入して盗掘を行う者も多い。しかし、境界侵犯が露見すれば全収穫物を森林保護官や侵入先の牧畜民に奪われるため、B・ラガップにとって冬虫夏草は決して安定的な収入源とはみなされていない。

セフ郡でも多くの世帯が冬虫夏草採集に従事するが、必ずしも全世帯が行っているわけではなかった。6000メートルの高地での採集作業は、牧畜民にとっても高山病と隣り合わせの危険な仕事であり、安全のためにも複数名での合同作業が必須だ。しかし、老人や子供の多い世帯では、十分な人員を確保することはできない。セフ郡のある女性は「途中で死んで誰もみつけてくれないし運んでくれない」ことを採集権放棄の理由として挙げた

が、それは彼らの現実的な感覚でもある。近年ヤクを手放した者は多いが、その理由の大多数が世帯人口の減少による人手不足として説明される。

しかし、カジ郡のB・ラガップにとって、ヤク飼養は共同体の成員としての義務と考えられている。B・ラガップの村でも、就学による牧童の不在など、人手不足は深刻であり、ヤク飼養の規模は確実に縮小しつつある<sup>\*22</sup>。しかしながら、それでもヤクを完全に手放す者がいないのは、それが「昔からの習慣」であり、手放せば「村人に何を言われるかわからない」(N村長)からだという。B・ラガップにとって、共同体への所属とヤクの飼養は切り離し難く結びついており、その放棄がときに共同体からの排除にも繋がりがねない危機感を、村人の発言は示していた。

### 3. 「高地民」政策とのかかわり

政府が実施してきた「ハイランダー・フェスティバル」には、ラガップからも出場者が募られ、N村からは毎年村代表を含めた3名ほどが参加してきた。しかし、参加者にとって印象的であった点は、「政府が招待して交通費から食費まで面倒をみてくれた」ことであり、自らが祭りの主体であるという意識はほぼ皆無である。ラヤやメラ・サクテンの牧畜民が独自の民族衣装やテントなどを持ちこみ、政府によるお仕着せの祭りのなかで観光資源としての役割を務めようとしているなか、特別な資源を持たないラガップは祭りにおいても周縁的な存在であった。また、国境に接する放牧地をほとんど持たない飛び地の高地民である彼らは、国境防衛の戦士としても、政府の青写真に合致するものではなかった。

このように、B・ラガップは実際のところヤクの飼養を共同体の属性とし、遊動性を保ちながら高地の放牧地でほとんどの時間を過ごすという、政府が思い描く高地牧畜民の姿を体現していたが、その価値が政府や国王によって顧みられることはほとんどなかった。国境問題の顕在化によって国王が北部高地牧畜民の村々を訪問した2017年にも、B・ラガップの村や放牧地は訪問の対象にはならず、夏の定住村であるN村が観光地やトレッキングルート等として登録されることもなかった。彼らは、道路も電気もない低開発状態に置かれたまま、時折政府から気まぐれに与えられる資源や注目を受け流し、低地に分節的な定住村を生み出しながらも、ヤクを飼うことを自らの属性とした共同体を強固に堅持し続けているといえるだろう。

## V おわりに

長らくブータンの政治経済の中心であった西部の中間山地の多くでは、コメを作り、ウシを飼い、チベット仏教のドゥク派を信仰する人々が主流社会を構成してきた。他方で、これらの属性を共有せず、ヤクに依存した遊動的な生活様式を維持する高地牧畜民は、雪に覆われた大山脈の麓に暮らす、タフだが貧しく野蛮な牧畜民として周縁化され、開発の文脈においては「低開発」状態に留め置かれてきた。しかし、それぞれ異なる文化的単位とみなされてきた高地牧畜民と農耕民とは、ブータンにおいてはネップと呼ばれる多元的な相互共益関係を通して不可分に結びついてきた。

農耕民のネツプは、屠畜労働の従事者や物乞いとして高地牧畜民を他者化し周縁化した  
が、同時に最も重要な年次儀礼に際して彼らを招き、儀礼のあいだは客人としてもてなし、  
仏教神や土地神の祝福や守護を共有するなど、親族・友人関係の末端に包摂してきたよう  
にみえる。しかし、訪問時に与えられる座所や給仕の順位は「擬制親族」というには非対称  
であり、「制度化された友人関係」という語が、二者の潜在的な権力関係をも包摂しうる表  
現としてより適切かもしれない。他方で、高地牧畜民の側からみると、農耕民から得られ  
るコメやムギは、自らの持てる資源と技術を放出した対価であり、農耕民は互いに必要な  
ものを交換する「交易パートナー」である。彼らは、けして自らを〈富を一方的に再分配さ  
れる受益者〉としてはみなさず、相互の平等性や対称性を強調する。農耕民が物乞いとし  
て認識した振る舞いも、高地民にとっては、夏の間の貸しを回収する行為に他ならなかつ  
た。交換関係は一年をとおして完全に閉じられることなく開かれており、そこには両者の  
長年にわたる信頼関係が不可欠でもあった。

しかし、本稿の後半でみてきたように、高地民の暮らしに不可欠であったネツプ関係は、  
冬虫夏草採集の解禁による代替的な収入源の開発や、政府の再定住政策による共同体の分  
断によって、現在、漸進的ではあるが確実に失われつつある。それは一方で、高地と低地の  
人々を垂直的に結びつける山岳地の歴史的な経済構造を改変し、山岳高地の暮らしを支え  
る知恵と、交易パートナーであり、施主と屠畜者であり、客であり物乞いであるような複  
雑で豊かな関係性の喪失を意味している。しかし他方では、高地民に現金収入をもたらした  
ことで、その経済的自立に貢献し、稲作農耕民を優位とする既存の階層性や非対称性か  
らの一定の解放を導いたともいえるだろう。

ヤクに代わる現金収入源の獲得は同時に彼らの牧畜離れも引き起こしており、牧畜とい  
う生業は、今や高地民に不可欠な属性ではなくなりつつある。そのなかで、B・ラガツの  
事例は、ヤクの飼養を共同体の属性であり紐帯として認識し、村人のゆるやかな相互監視  
がヤク牧畜からの撤退を抑止している数少ない事例の一つである。彼らは複数の村に多数  
のネツプを持ち、世帯や季節的な需要に応じてその家々を渡り歩く開放性や流動性を大き  
な特徴とする一方で、内婚集団として他者の侵入を牽制するなど外部に対する閉鎖性を持  
ち、生業に関しても強い規範を持つ自律的な共同体を形成してきた。

定住村と夏の放牧地が北部国境地域から離れた飛地的な高地にあるという地理的条件  
は、低地の農村との相互アクセスを容易にし、ネツプ関係の複層性を強めたが、同時に北  
部国境付近に分布する冬虫夏草の採集適地へのアクセスを相対的に困難にし、採集量の不  
安定性や非持続性を認識させた。「ヤツアゲンボ(冬虫夏草)はいつ採れなくなるかわから  
ない」「ヤツアゲンボが採れなくなれば、またヤクに頼るしかない(だからヤク飼養を止める  
ことはできない)」と、語るN村の高地民にとって、ヤクは共同体を結びつける象徴資源であ  
るにとどまらず、人々の暮らしを実質的に支えうる、持続的で頼りがいのある財であり続  
けている。

中国による国境侵犯が顕在化して以降、ブータン政府は高地の人口減少を、国境防衛上  
のナショナルな問題として捉え直してきた。一方で近代化や開発のために低地での定住化  
を推し進めつつ、他方で国境防衛のために高地での牧畜生活の継続を推奨するという、矛

盾する二つの政策方針は、低地に半定住のための村を建設しつつ山岳高地でヤク牧畜を継続する折衷的な「高地民」を生み出している。今後、高地の村の電化や道路建設が進まない限り、彼らが一度手に入れた低地の分節的な定住村を手放すことはないだろう。低地での生活の比重が今以上に高まるとき、B・ラガップのような高地牧畜民社会が現在のような強固な共同体をどこまで維持できるかは未知数である。ヤクを持たない者の排除が一層強固になれば牧畜民としての共同体が分節化する可能性を否定できないが、冬虫草草採集が人々と高地とのつながりを保つ限り、人々は高地民としての自己像を持ち続けるだろうか。高地民であることと牧畜民であることが必ずしも同義ではなくなった現在、本稿でみた複数のラガップの共同体にとって、果たしてどちらがより強固な紐帯あるいは規定要因となっていくのか、今後の研究でさらなる動向を見守りたい。

## 註釈

- \*1 ヤクは、ハ、パロ、ティンブー、ガサ、ワンディポダン、ブムタン、タシガンなどの北部諸県で飼養されている。
- \*2 ブータンでは1980年代半ばより「伝統文化」保護政策が実施され、西ブータン地域の母語であるゾンカ語と特定の民族衣装（ゴとキラ）、仏教に基づく礼儀作法などを用いた国民文化統合が試みられる一方、観光地図には異文化としての北部山岳高地牧畜民の姿が描き込まれ、観光資源として活用されてきた。
- \*3 後述する高地牧畜民B・ラガップの主村で15年以上寺守を務める男性は、以前に大臣が訪れた際、食事を提供するため村人から野菜を集めようとしたが、B・ラガップらは「洪々袋半分の玉ねぎをもってきただけ」であり、外部から来た役人や客のために村人から労働力や食材の徴発を行い集会を開くといった、ブータンの農村部で当たり前に行われてきた習慣を実施することがいかに困難かを語っていた。
- \*4 第一回高地民会議の詳細は、クエンセル新聞 (*Kuensel*) の記事 “Take development to the highland” (20th Oct, 2017) を参照のこと (<http://www.kuenselonline.com/take-development-to-the-highland/>)。
- \*5 2017年の政府家畜統計によると、家畜総数はウシが30万3250頭、ヤクは4万1528頭となっている。
- \*6 100ディスマルはおおよそ1エーカーに対応する。
- \*7 買い手としては35名の輸出業者が競売に参加した (*Kuensel*, September 5, 2017)。
- \*8 日本円では3億円程度 (1ヌルタム = 1.472円とした場合2億9千881万6065円)。
- \*9 <http://www.wfbhutan.org.bt/?199741/Second-Nomads-Festival> (2019年8月閲覧)
- \*10 5th Nomad festivalの詳細は以下のウェブサイトを参照 (<http://www.moaf.gov.bt/5th-nomads-festival/>) (2019年6月閲覧)。
- \*11 <http://www.moaf.gov.bt/sixth-nomad-festival-held-at-thangbe/> (2019年5月閲覧)
- \*12 <http://www.gasa.gov.bt/tourism/royal-highland-festival> (2019年5月参照)
- \*13 ヴァン・ドリーム (George van Driem 1998: 15) は、同書における「ブロクバ」の初出時にこれを〈タシガン県の東端に住むヤク飼い〉と定義したが、ラカに関する文章ではブロクバをより包摂的に〈ヤク飼い〉の総称として使用している。
- \*14 ポブジカ谷南部の牧畜民が使用する言語はヘンケと称され、村人によるとそれはセフ郡北部住民の言語と同じであるという。したがって、ヘンケとヴァン・ドリームが同定したラカはおそらく同一の言語と考えられるが、専門家による同定を待ちたい。

- \*15 稲村の記述ではネップ関係のおおまかな輪郭は示されているが、交易の頻度や対象、「擬制親族」関係とされるものの詳細は記されていない。
- \*16 ブータンにおける屠畜者の位置付けに関しては別稿(宮本 2014)も参照のこと。
- \*17 N村の牧畜民男性によると、多くの供物を持って行けば例外的に仏間に招かれることがあったという。しかし、B村の農耕民世帯の男性は、「ラガップは風呂に入らない」ので臭うとして、仏間には入れずいつも野外に寝かせたと述べており、扱いや関係性には個人差があったと考えられる(2019年11月のB村での調査より)。
- \*18 この放牧地はB・ラガップのうち10世帯が共通で利用しており、傾斜の少ない開けた場所にそれぞれの世帯が木造の簡素な住居を建てて生活している。小屋は壁や屋根を補強しながら繰り返し使用され、1ヶ月後には別の放牧地へ移動する。
- \*19 カジ郡B村とシェガナ郡S村はトランスヒューマンスにおける夏の村と冬の村の関係に当たる。同一世帯が秋から春にかけては温暖なS村に滞在してコメなどを栽培し、夏になると比較的涼しいB村に移動しトウガラシやコムギを栽培した。しかし、現在までに多くの世帯が二村の農地と家屋を兄弟姉妹で分配し、どちらか一方の村で定住的な生活を送ることを選択している。
- \*20 うち1世帯は2011年に100頭を、北部国境を覆うガサ県ルナナ郡の牧畜民に売却していた。
- \*21 毎年の競売の最高値や収穫量の合計はDepartment of Agriculture Marketing and Cooperative (DAMC)より発表され、その後全国に報道される。
- \*22 聞き取りを行ったB・ラガップの3世帯は、以前はヤクを約100頭ずつ飼育していたが、現在は20頭から30頭まで規模を縮小している。

## 参考文献・引用文献

- 稲村哲也(2014)『遊牧・移牧・定牧: モンゴル・チベット・ヒマラヤ・アンデスのフィールドから』ナカニシヤ出版。
- クラストル, P. (1989)『国家に抗する社会——政治人類学研究』渡辺公三訳、水声社 (Pierre Clastres (1987) *State Against the State: Essays in Political Anthropology*)。
- 月原敏博(1992)「ブータン・ヒマラヤにおける生業様式の垂直構造」『ヒマラヤ学誌』3号、133-176頁、京都大学ヒマラヤ研究会。
- (2000)「移動牧畜の類型と遷移に関する考察」『人文研究』第52巻、第8分冊、47-71頁、大阪市立大学文学部紀要。
- 宮本万里(2014)「現代ブータンにおける屠畜と仏教: 殺生戒・肉食・放生からみる『屠畜人』の現在について」『ヒマラヤ学誌』15号、72-81頁、京都大学ヒマラヤ研究会。
- Khazanov, A. M. (1994) *Nomads and the Outside World*, 2<sup>nd</sup> ed. University of Wisconsin Press.
- Scott, J. (2010) *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. Yale University Press.
- Van Driem, G. (1998) *Dzongkha*. Leiden: Research School of Asian, African and Amerindian Studies.



## ■ 著者紹介

- ①氏名(ふりがな):宮本万里(みやもと・まり)
- ②所属・職名:慶應義塾大学・准教授
- ③生年と出身地:1977年、北海道生まれ。
- ④専門分野・地域:南アジア地域研究および政治人類学・ブータンおよび北部南アジア。
- ⑤学歴:山口大学人文学部(社会情報論コース(当時))修了、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(東南アジア地域研究(当時)専攻)修了。
- ⑥職歴:日本学術振興会特別研究員(PD)3年間、北海道大学スラブ研究センター学術研究員18ヶ月間、人間文化研究機構地域研究推進センター研究員3年間、Newton International Fellow of British Academy 2年間。
- ⑦現地滞在経験:大学院在学中、松下アジアスカラシップのフェローとして国立ブータン研究所に1年間在籍しブータンの国立公園及び村落地域で長期滞在調査を実施した他、現在までブータン、インド(シッキム州、カシミール州、北東インド諸州等)などで断続的に現地調査を実施してきた。また、博士号取得後は英国アカデミーのニュートン国際フェローとしてロンドン大学SOASの南アジア研究所に所属し、2年間研究に従事した。
- ⑧研究手法:自身の研究において、フィールドでの体験や聞き取り調査のデータが一次資料及び考察のヒントとなる比重は大きい。現地では一方で現地政府や各機関の政策やプロジェクトに関する資料収集とインタビューを実施し、他方で村落地域での村人への聞き取り調査と参与観察からそれらの政策の実効性や社会的文化的影響、人々による翻訳過程を考察している。
- ⑨所属学会:日本南アジア学会、日本文化人類学会、ヨーロッパ南アジア学会(EASAS)、ヨーロッパ社会人類学会(EASA)他。
- ⑩研究上の画期:(特にないが、あえて言えば)地球サミット(1992年@リオ)の開催などを契機とした地球環境問題に対する世界的な関心の高まりが、(環境保護を国是とする)調査対象地域への注目を導き、当該地域における学術研究の必要性に対する認識も高めた。また、台頭するインドや中国が「地域大国」と認識されるなかで、その周辺諸国の社会に関する知見が相対的に重要度を増した。
- ⑪推薦図書:辛島昇・応地利明ほか監修(2012)『新版 南アジアを知る事典』平凡社。